



佛家新聞

明治二年冬



俳家新聞

此より諸俳士の新聞を集りて四巻なり
活字の板を摺之に都を云々及ぶ遠く
諸國より送る其の俳士の句をいふ
之中より載くるを以て其の古きを
新什海内へ傳へて編輯摺物
ありし得けりしを新しきもの
風子やの秘惜なく玉付を懐く
事なき希ふる也

京都之部

梅又ハ毎一のたりたり初時面 培壘
有りの紅葉ハと葉や初しと札 女培升
登志そく氷の上結あられうり 女錦升
助炭より板ひのりる手ふまむ 菊雄
新顔の種こほしり時面うり 五依
山とさ記口結の葉や貢炭 香陽
小藪を掃除をませて冬あがり 露山
自代よなるうり子有結造うり 擇市
落て又深る雲も阿り麦のうり 林隣



子よ野を相結火降や 老婆心 采芹
 寧以顔たりの久よ名をぬき見し 公兄
 鱈鱈今来た有と 如もハ世は 泰民
 橋の雪さおやゆる 日和かあ 美喜
 藪のけや喚あり見きぬ冬ゆ梅 梅権
 何を解よ一日浮世や 他ゆ鴨 狐登
 八智も宙なく色て 如世尾世 在我
 学臥も覚ゆる徳也 冬去毛り 文巢
 去世さうに赤き紅葉や氷面鏡 未曉
 赤土法上たけりまき 氷う丸 赤陽

嫁よある顔見せよ来る年の暮 関菊
 群植の袖子もき惜むしくれは 眉雨
 初冬や招をかきくの暮のつら 永年
 さうくくと降て跡あき寂うの 巴山
 名を呼て通吉人けり冬あも里 里木
 と不れ菜に鶏の集る小春う丸 龜湯
 春まつや巨魁のう人に福葉草 龜悦
 以ろく結あにうつる火神か 哥来
 返る日結まご同よ立は冬ゆ梅 内地
 一枚の落葉に氷結うときうり 如白

冬の暮りやぬれ日もあり 冬籠
何の苦も忘れ玉のとりおの雪
録掃や日和のよきを 吉日に
滋柳はく門くしうなる時面は
乞食の魚さき〜 観く寒さう丸
冬の夜や灯籠の波る 衣敷味
ゆふのを叩けハ燃る指火は
試し風あふあける小春の味
以多きよ麦蔵く山やゆり糸
掛乞も来ぬハ待きて面のかと

冬籠
五柳
可仙
未休
如瓶
雪籠
素水
不深
青魚
金

松雪や雪も霜をく 暮麦雪
西風のまじう〜に枯〜 尾花は
風は鐘以く門にもきこ〜り
松魚とい遺ふや飯の煮とあろ
聲のある物と思へは春の露
冬くれや有る所を報る年忘
おき巨魁呉天の雪結ふる報は
枯菘や〜垣の踏目の面何うり
降やんて袂のぬき〜あきか
寺の燈へ掲提て来ると〜

菊友
小雲
呂直
交屏
如草
瑞来
素薄
三水
象新
急知

貝焼戸 舌おあらきぬ 元徳
 朝毎や炭の香しうも起ちう
 静なるおにお聴けさふさう
 濡る来と汗のせうき時首
 きの冬やまこましき菊も
 小春白や名も有さうお松系
 初雪ハ卯の糸布との雪さう
 土地の尻の下結て踏け落葉
 きし峰に道さうけり日御
 やうきく僧ハ暖める時首

夷崎 花畦 嘯首 山月 挑仙 女心 佳叶 未和 弘海 尾正

きの冬や刈田はめたる草の香
 雪積やきし先ハ山の吹おろし
 庭よ雪うつしを晴る雪峰の丸
 色よきハきや敷ぬる紅葉の
 長閑さの冬に古そあれ成り鴨
 踏揉る月もけるおや雪の入
 後啼しきしらるき之風竹篠
 十月や暮るまはぬ日の暮る
 夕光をわろきしきり雪の山
 山果をちぬのしむ振や籠の香

可尊 芳泉 西雄 成伍 香以 永撥 芳学 宇山 友史 左年

春風北条味よりありぬ 雪は春
不こりを誘ふも〜里や時雨空
夕方北又ぬえり来る 鶴 鶯

春風
氷壺
三子権

秋の明る夕 暮志より 細代守
招きも波えぬ秋半 千 確千有
埋火ハあへては嬉し〜二妻難
改る秋を深き切と あきの月
照込〜暖くあふつうあや〜孫

補助

と成
然地
鬼尺
鼎左
徳水

枯る秋や萩よ山のれり山下
炭の香やふも暮んの 獨言
然程をあらめら進り年市
端八戸 遠道うけと 茶一盃
江の上よ突出し〜有り雪の山
袴とる藁のに布ひ や冬の梅
捨杭の中洲よありて冬の川
子酔り興ハあ〜と空あ〜ん
業平の信を思ふ
秋方うて夢のやうあり雪の門

艾園
梅裏
羽洲
蓮宇
素山
宿山
兄介

未足

縁なきも響響の春世り糸紅糸
思樂 大蟲

編者

我物とまの酒落也蛇が目傘
多城 奇泉

秋分正誤

或園人名 静巴白 萩の吟

園遺 齋 知泰 松夫句 携衣

梅系女 朝露

文章之部

霜煙の中よきめく 女中糸 糸 蕉露

余意なき子有法遊ふり 和らめ 菊文

下糸の自叙も見えたり 阿々 蓮郷

年の市白木浦ハゆき竹の移り 風々

去らるる一也一里も服法藪の音 雪毅

下初冬ハ夜に也 志志小春の光 碩水

ぬくわりよ水へ遠入り 岸の鴨 糸魚

同一人來ておそよくれ 冬籠 赤南

何よ秋を動ハ更して 体抑 自撫

川にハまゝと秋の明は霜は露
 志なき水ハ一日晴の曇り
 夕添ハ様々津のさけん
 其み出して香の散る芭の茸
 以ろく吹風もいとハ何豚汁
 枯て乾きよきハ〜き尾花
 露の降りるハ木の葉や香初山
 木の葉火を囲うと立や細の人
 葉も虫奴梢鳴ら〜と初志なき
 日ハ嗟味の少く近よる小春

強仙 河蓼 一敬 成齋 貸舟 杉西 香岳 法節 交海 拾山

冬月や〜と横糸に玉ある川
 冬の梅白〜と冬ハおひひり
 次の冬一出と志る炭は薫り
 今朝う〜の雪うき分と庭燎
 けち〜ふ人に灯を借る霜ねが
 掃色てきり〜き庭の落葉うね
 秋阿〜の姿ハ去きよ葉の露
 海言ふ見ええて日の入枯野うね
 香を付と見れハ瘦り放色響
 流連ま〜子と運ハせと大根引

菅馬洲 尾張 静雪 蕙岳 落葉 萱雅 可真 疎雨 百牛 烏噴 東梧

渚一眠日見らばとて空一葉喰 彦 秋夢
 星御のてりく満る小春の丸 言之
 風音にえりく 戸 鳩の冬末立 半仙
 明のこや水回又一つをなれ鴨 後学
 寂あれハ観以て色る枯雪のふ 一夢
 松高くあかむる冬と成より 一物
 夢の雪落をまぬきと緑めより 春月
 余所の鐘つて鐘つて霜ねの如 里信
 十月結茶と出かきく 志と色は 宙室
 冬枯戸 聖川より月の物わらけ 長月

松風毛香あきまをに氷りより 露光
 藤の目をひよこの抜る冬さハ 杜堂
 降もせて空一 一日鄙くもり 麓 岫 菫
 袖笠のまの雪見せて挿むより 甲斐 香芸
 丘に居るまのこは雪を家鴨の 豊 唯吟
 待る日に咲ぬの冬を 梅の冬 士敬
 画心ありきも志くれか松に鶴 相推 琢皂
 田ありく草木はあふに水仙也 雪水
 降出しか見を採る雪結ねの如 密藏 聖井
 今んまのあく結糸よ枯屋をき 五後

二々布と色を冬にすく秋は
 寄三
 字偏くら秋より霜を踏より
 皆如
 院注にゆとり色とり 炭一結
 卜儼
 風如若うとか毛ーう葛籠
 亮踏
 のむ雪やまると菊をき人通り
 魚之
 様揃と語より古り 家
 静亭
 り雪の照るや 燈ん枯るき
 夢江
 見とあれハ果して勤く海荒れ
 峨雪
 夕棠中つらりと並ふ他の野
 有雙
 花とふる木の葉の灰や法枕

菊の性へ雪まきを出入る
 菊外
 雪菊の極よまきまる雪の音
 標年
 旭き清色のち妙う やう雪氷 東梅園
 意先也 今年植くる時季ー 遠草我
 何の木に咲くも白ー 偏り糸 下注 肉片
 兄先元の何る類も何り 辨打 約肉
 着合の時向とーのみ 時向うの 養 各何
 一枝ののる白結きー ぬ偏り糸 全
 切干中葉子も並へて山の所 聴松
 雪ハ日の入るもやまはる色花 半山

如彼彼方そつひと升今朝の雪 有雅
 未造り結椰子ゆつゝぬ初時面 越夢 布瑞
 鴉より初明の果し一箱走く先 秋仁
 炭負うを棧出た也一風のひ備 如美 晴江
 窓へ来る雪ハと備う一津無月 崇寧
 窓と壁か更しとううを鶺鴒印 大夢
 右の雪結危上志とりひいし 山 然后 奕史
 有より此雪うをりよりかれ極 葭堂
 名る人の雪さハあつた他の雪 古棠
 手へうきや炭火活かす膳の疎 儀 純如

秋日和雪よゆつ至る小春う九 儀面
 横より一雪よ先しつ一時面 因幡 巳大
 半凍まをやハ高き音や小六面 揚屋 招聲
 きらくく水ハ流急る葭印 桑 連梅
 突張のきゆとちりや雪の家 阿波 若一
 陣雪ハ海一かし出る雪の自 紀伊 梅徳
 右つ雪や左や京市ハ梅つをき 大坂 素屋
 まと雪と阿る埋火也一船より 二條
 雪ハ急のぬき備や雪の局 宇尺
 あん布と結出に喰つて枯雪ハ 大牟

不_レ之_レ言_レ一_レ一_レ武_レ藏_レ聖_レ廣_レ一_レ一_レ不_レ世
 一_レ一_レ皆_レ之_レ響_レ響_レう_レの_レ小_レ舟_レの_レ如
 解_レ一_レ一_レ其_レる_レ狐_レの_レ聲_レや_レ響_レは_レ自
 山_レ葉_レの_レ葉_レの_レさ_レなる_レや_レ蔵_レの_レ上
 以_レつ_レの_レ留_レ一_レ一_レ隣_レ一_レ往_レと_レ持_レ歸_レ鷲
 雪_レ一_レ日_レ師_レを_レ去_レく_レあ_レの_レゆ_レる_レ安_レ危
 和_レ律_レ乐_レ一_レ一_レ香_レの_レ香_レの_レお_レハ_レ星_レの_レり
 新_レ一_レ一_レき_レ雪_レの_レ白_レふ_レ時_レ面_レの_レ水
 藪_レ村_レ一_レ一_レ方_レ口_レを_レ来_レる_レ志_レと_レ是
 教_レを_レも_レあ_レき_レを_レさ_レれ_レや_レ鶴_レの_レ聲_レ

赤彦 其治 其自 井浦 鳥秋 自雲 梅英 芥水 杜鵑 響岩

空_レの_レえ_レ吹_レぬ_レり_レ去_レる_レや_レ鶴_レ鷲_レ 持_レ 山_レ阜
 古_レ藏_レ聖_レ一_レ一_レち_レら_レ向_レと_レふ_レ虫_レの_レ聲_レ 後_レ 物_レ亦
 暖_レ心_レの_レ結_レさ_レ一_レと_レ難_レ一_レ一_レ木_レ葉_レの_レ 出_レ羽_レ 江_レ春
 杖_レ先_レや_レ雪_レの_レ葉_レの_レお_レち_レら_レ向_レ 健_レ矣_レ 清_レ民
 葉_レの_レふ_レの_レを_レよ_レ響_レま_レる_レ響_レさ_レの_レ如
 秋_レを_レか_レけ_レと_レ爽_レ子_レよ_レ宿_レの_レ笑_レひ_レか
 想_レも_レ去_レう_レく_レ香_レの_レ香_レの_レあり_レ柏_レの_レ葉
 何_レ豚_レ汁_レや_レ穢_レ燭_レ足_レと_レ其_レ買_レよ_レや_レる
 け_レ控_レよ_レりの_レ何_レく_レく_レ之_レ録_レを_レら_レひ
 山_レ里_レや_レ自_レ教_レと_レ其_レ里_レを_レ小_レ其_レ里

山阜 其治 其自 井浦 鳥秋 自雲 梅英 芥水 杜鵑 響岩

音	聲	ノ	や	学	来	も	成	る	時	分	と	と	振	臺
唇	白	中	一	喉	と	中	う	之	音	清	を	き	安	々
左	口	目	と	狐	も	来	ぬ	り	枯	尾	花	葱	玉	
以	伏	の	を	の	ぬ	淋	一	き	枯	竹	の	音	鬻	鳧
を	枯	平	何	を	平	一	ぬ	ふ	水	の	音	交	来	
枯	ぬ	道	ハ	道	筋	の	ハ	る	尾	筋	の	一	僊	
今	細	と	見	一	人	も	来	と	干	秋	の	遠	荒	
鐘	の	聲	ノ	下	音	あ	ら	り	能	落	葉	の	麥	
													浪	



